土居光知著

文學序說

〔再訂版〕

岩波書店刊行

昭和二年二月一日 增訂第一刷發行
昭和十七年一月十二日 第十四刷發行
昭和二十四年六月二十日 再訂第一刷發行
昭和二十六年二月二十日 第三刷發行

文學序說
定價四百八拾圓

譯者 土居光知

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
發行者 岩波雄二郎

東京都板橋區志村町五番地
印刷者 山田三郎太

發行所 東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三 株式會社 岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

凸版印刷・青木製本

改版に際して

この本は大正十一年六月初版を、昭和元年十二月第二版を刊行した。私がこれら日本文藝上の諸問題を考えていた時には、明治十年頃から始まつた日本近代文學の展開がその最後の段階に近づき、新らしい文學のあけぼのが期待されつゝあつた。今になつて考えてみると、たゞに明治大正の文學のみならず、大和朝時代から連續してきた日本文學が民主々義の思潮の中に更生すべき時期に近づきつゝあつたのである。「日本文學の展開」「詩形論」等はおぼろげながらかゝる豫感を以つて書いたのであつた。

またその頃第一次世界戰爭が終り、國際的平和の時代が待望せられ、日本文學もまた世界文學に聯結せられるべきことが期待された。「國民文學と世界文學」、「原始時代の文學」「文學の樣式の展開」、「近代英文學に於ける批評的精神」「自然の愛の發達」はこの雰圍氣の中で書いたのであつた。

その頃の日本は輝かしい希望をもち、思想の表現は比較的自由であつて、日本の古代神話が原始劇として傳へられたといふような說や、世界文學の片隅に日本文學を置いて見ようとするような比較研究の態度に對しても寬容であつた。しかしその時期は短かかつた。昭和の時代になつてから思想の自由、寬容は次第に失われた　終戰以後思想の自由は與えられたが、それとともに日本的精神の傳統に對し幻滅感に影響されることをいかんともしがたく、日本の文學は國民の心をめざまし、强くすべき精神力となることができずして、逃避或は娛樂のための道具とならんとする憂

いがある。

しかし日本人が敗戰の荒廢から立ちあがつて、文化的創造にいそしむ國民となり得んがためには、過去の傳說、文學に對しても嚴正な批評を加え、過誤を正し、健全なるものを育てゝゆくより他に道はないであろう。言葉を改めんがために、日本語をすてゝ、外國語を國語とすることが不可能であるとすれば、言葉の性質によつて支配される詩歌に關しても、過去のものを全然すてゝ、外國のものを移植することは不可能である。

今この本を讀み返してみると、希望に陶醉しているような章句を見出すのであるが、それは第一次世界戰爭の後、關東大震災に至る間の日本にとつて最も幸福であつた時代の影響であるようにも思われる。われ〳〵は今日この希望を失つたが、これは將來に於いて恢復することの願わしいものであろう。かく考えて私は字句の修正をもなるたけ控えめにし、殆んど原形のまゝで第三版である新版を公けにすることにした。

第三版を出すに際し私はこの書が二十數年の間に受けた批評に對し感謝と答えの言葉とを添えたい。本書に於いて私が公けにした新說は、一に、日本上古の傳說はかぐらのような原始劇として傳えられて來たこと、二に、日本文學は敍事、抒情、物語、劇のような順序で展開する傾向があること、三に、日本詩歌の型式の研究は「氣力」の法則を認め、時間的な音步を見出し、それを基礎にすることであつた。第一の說に對し反對說は私の目にはふれなかつたが、私はその後この考えをおしひろげ研究をつゞけて來たので、「古代傳說の研究」と題して來年中には本を出したいと思つている。

第二の說に對して岡崎義惠氏は「日本文學の樣式」五三一ページに『大正九年に發表された土居氏の日本文學の展開は、敍事文學、抒情文學、物語小說、劇文學（及び哲學的宗教的文學）の如きジャンルの隆替によつて時代の流動

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の相を規定せんとしたもので、文藝自體の世界による時代區劃が始めて確立されたと言つてもよいものであつた。併しこの見方は一時期の内部の流動をジャンルの展開によつて明かにし得たものではあるが、それが第一期、第二期、第三期という風に反覆されることを說くに當つて、その各期の變化を規定する方法が無理でもあれば、又不徹底でもあつたという缺點が認められない事もないと思う。』と言われた。私はこの岡崎氏の言われるとおりであるとも思うが、しかし次のような辯解をしておきたい。私はこの文學展開の基礎概念によつて、奈良朝から平安朝末期まで、及び明治大正時代の文學の展開は說明したように思うが、鎌倉時代から德川末期に至るまでの封建時代に於ける文學展開を私の基礎概念にあてはめることができなかつた。この時期に於いては日本の社會自體が正常な生長をはゞまれていた。社會が健やかな進展をなし得ない時に、その社會の生產である文學が正常な發展をとげる筈がなく、このような時代の逃避的な、或いは頽廢的な文學を價値づけるような文藝理論があれば、それは反つて普遍的價値を疑われてよいとも考えられる。また日本の社會は進展の速度がゆるやかであつて、萬葉調の和歌や蕉風の俳句が今日も行われているように趣味の固執性が非常に强い。それ故に、各時期の移り變りを規定することが不徹底になることを免れない。これも基礎概念の缺點とのみは言えないであろう。

私はギリシヤ文學や英獨文學の比較研究から、文藝展開の普遍的な法則を見出して、それが日本文藝の展開に適應するか否かを見ようとしたのであるが、かゝる態度は當時排斥されがちであつた。當時の學者は日本の文藝學は日本に獨特な樣式或は美意識を見出し、それを基礎にして建設さるべきことを主張し、あはれ、おかし、幽玄、わび、さび、しぶみ、いき、等々の術語によつて日本文藝が說明され、能や和歌や俳句は世界に誇るべき文藝であることが主張された。私はこの態度によつて日本文藝の特異性がよく說明されたことを認め、また日本文藝を國學から解放した

ことを認める。しかしこれらの術語は外國語に譯することも、外國の美意識を表示することもできぬような、獨特神祕的なものであつて、日本文藝學を世界文藝からひき放したのではなかつたろうか。私は日本文藝を再び世界文藝に聯結し、文藝の研究に對して國境をなくし、世界的な文學をできるだけ我々の心の中に受け入れるようにすることが文學者の任務である時代がめぐつて來たように感ずる。私は「文學序說」に於いて私がとつた態度が認められるような時が來たのかと思つた。

ところが昭和二十三年八月號「文學」に澤井孝子郎氏は「日本文學史における時代區分の問題」という論文の中で、次のように私の態度に反對している。『土居氏はボエやモウルトンの流れを汲む周期理論に立脚して、日本文學の展開を論述し「文學はすべて人間性の表現である。されば これを貴族文學、武家文學の如く分類するは本質によつたものではない……」と說いて居られるが、貴族文學、武士文學なる名稱の當否は別としても、歷史的社會的な諸契機から隔離せられた普遍的人間なるものが歷史的現實の中に生きている人間ではなく、單に觀念的な人間性一般に訴えるものが文學の本質なりと斷ずることの誤は今更指摘するにも足らぬであろう。』（文學一六卷八號七頁）

モウルトンは文學樣式の分化を說明したが周期理論を唱えたことを私は知らぬ。また私の周期理論がボエ氏のそれに影響されたものでないことは本書の「文學樣式の展開に就いて」の章の初めの數ページを讀めば明かになるであろう。次に人間性は「歷史的現實の中に生きている人間でない」ことは澤井氏の言われるとおりである。また人間性を基礎にして文學を論ずるとは、「肉體的に體驗的に把えられた人間、卽ち現代人間を據りどころとし、そこに普遍の人間が見いだされるとし、そういう人間のものさしで、學問の名・文學の名において古典のうちの人間を計量する』ことを澤井氏は意味するらしいが、それは私のいう人間性の觀念とは全く別ものである。本書の二六五、二六七、二七

九、三五四、三六五、三七〇ページ等で述べた如く、人間性の觀念とは未だ完全には實現せられない——完全に實現されたとしたらそれで人間の進歩は止まつてしまう——觀念であるが、その觀念は人間文化が一つの綜合或は調和に達したような時代、例えばギリシア文化の開花期、レオナルド、ミケランジェロ、ラファエル等の出でたルネッサンスの時代、ゲエテ、シルレル等の生きていたドイツ等に於いて想見せられた觀念であつた。それは人間の靈肉の調和をはじめ、各方面の性能及び性質の調和の上に豫想される觀念であつて、物質方面にかたよつた人生觀によつても、精神方面にかたよつた人生觀によつても認められることはありえないであろう。私がこの觀念を歴史的社會的諸契機から隔離したならば、それは私の視野の狹かつたためであるが、私は文學自體の展開の法則を求めながらも歴史的社會的諸契機に結び付けようとはつとめたつもりである。但し私がこれを書いたのはマルキスト的見解が文學理論の中へ進出して來ない以前のことであつて、左翼的理論家によつてこの書が不滿足なものであるのは自然なことであろう。歴史的社會的な諸契機の壓力によつて文學は影響せられ、その點から見れば文學はその時代、社會の生産であるが、他方に於いて文學はそれ自身のうちに生長の諸契機を包含しているともいえる。それは主として過去の社會からの傳統として個人の作家に働きかけるのであつて、その結果としてそれを生産した社會や時代を超越する性質をもつている。そのために萬葉集の歌やシェイクスピアの劇が今日の日本人にも感動を與え得るのである。もし歴史的社會的な諸契機のみを基礎として文藝を考察するとしたら、我々はその時代の社會性を見、その社會に生活していた具體的な人間を想像し得るのであろうが、他の文藝的價値を認めることにはならないであろう。私は文學の展開を語らんがためには文學自身の中にある生長の諸契機に注目せねばならぬ。そしてそれは文學をその時代及び社會から遊離せしめることではないと思う。

第三に、音律論の基礎に關しては昭和五年二月、金星堂出版、現代講座第一卷（詩學及詩歌論）の「日本音數律論」、の中で福士幸次郎氏は二五八頁以下に、「土居の說は岩野泡鳴氏の說に負うている。五音七音を三、二音等の音數單位に分割して考えるということは一つの獨創である。もし土居が岩野氏の說に注意したなら岩野氏の一音孤立の否定等に就いて今少し考え、詩脚が一音、二音で成立するというような誤謬はしなかつたであろう。……一音の孤立するや否やの問題は日本の音數律では實に根本問題である。私（福士）の論文もこれには最も力をつくした」という、要するに、久しいあいだ音律單位と考えられてきた五音や七音を分解して二音、三音、四音を諧調の基礎をなす音數單位であるとしたのは岩野氏の創見であるが、福士氏はその說を一部分修正し、卽ち四音脚を認めず、四音脚とは二音脚二個からなり、脚としてはたゞ二音脚と三音脚との二つだけを認むべしと主張せられた。

この福士氏の批難に對する答えは「日本語の姿」の第二七頁以下に於いてしておいたので、こゝにはたゞ、私が求めた音律の基礎は純粹に時間的な、等時性の單位であつて、岩野氏や福士氏の音數律論とは全く異なるものであり、私は一音によつて表示せられる等時性の時間單位を實驗によつても示したことをのべておきたい。

昭和二十三年十二月

目　次

原始時代の文學……一
原始劇は葬式より發生したか……一
古事記の記錄——書紀の記錄——魏志倭人傳の記錄——天の石屋戸の舞——支那印度に於ける上古の葬式との比較——祭祀と原始劇——上古に俳優ありしか——歌は歌垣から發生したか——上古の社會狀態と性的舞踏の關係——性的舞踏が葬式の一部であつた理由
比較文學の暗示する劇の起原……一三
ソロモンの雅歌——ギリシア悲劇も葬式より始まるとの說——ディチュラムボスとファリコス——エレウシスの祭祀の劇的要素
原始的言語と物眞似……一七
言語は遊戲術動によつて發達する——上古の唱和の歌は眞劍な行爲の中で作られたものであり得ない——性愛に關する唱和及び所作事が建國の歷史にとり入れられた理由——現代人は默讀し、數百年以前には調子をつけて音讀し、千年以前には詠歌し、上古には舞踏した——ギリシア民謠及び神祭に於ける劇的要素——太古の共通語としての物眞似
詩經中の民謠……二五
男女唱和の歌として見た國風——詩は音樂として論ずべく、目前の所作事として見るべきである——詩經の歌謠

の作者

古代歌謠の作者……三三

上代の舞臺……三六

日本上代の二階家屋——武梁祠の畫象石の重層樓閣との比較——生命の樹の傳說——西王母の傳說——支那傳說の魚鱗の屋——古事記の傳說の魚鱗の屋——天を表象する家屋、神々の住居

劇として見た神代記……五〇

神話の表現に於ける劇的要素——上古の劇がはやく忘却された理由

舞謠歌から個人の歌へ……五七

短歌の形式はいかにして生じたか——問答歌としての片歌——旋頭歌——東歌

日本文學の展開……六四

傳說及び敍事文學……六四

神話と歷史の境界線——神話の發生地——我國の神話の神々——國つ神と天つ神——自然神と祖先神の同化——田舍人の神——須佐之男命の傳說の自然現象としての解說——日本神話に於ける政治的要素——日本神話の特質と他民族の神話との比較——農業を中心とする生活の神話に與へた影響——古事記の性質、編纂の時期——古事記に表はれた日本精神——我國の敍事文學が散文體である理由

抒情文學の時代……七三

敍事文學の後に抒情文學が生ずる理由——自我覺醒の順序——性的生活の醇化と抒情詩——上古に於ける母、妻、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

戀人、處女讃美——歐洲抒情詩の主題と萬葉の主題との比較——古事記の歌と萬葉の歌との比較——萬葉に於ける戀の意味——奈良朝の抒情的精神と外來文化——國家中心主義と個人中心主義——我國最古の抒情詩人——日本文學の主觀的なる理由——戀歌と四季の歌との關係

物語の時代……八二

抒情詩から物語が生ずる理由——萬葉と古今との比較——奈良朝の色調と平安朝の色調——體驗の歌と典型の歌——日記文學——物語の內容——隨筆文學

主情主義否定の時代……八七

平安朝の文學を生產した人々の境遇——感傷的な心を超越せんとした努力——時代精神の頹廢——つれ〴〵の心——徒然草に表現された兼好——連歌流行の理由——鎌倉、室町時代の文學と宗教との關係——第一期文學の綜合としての能——第一期文學を通じて見たる美意識の發達

日本文學の類型と第二期の展開……九七

類型表——各時代に各類の文學がある理由——各時代を代表する特殊の文學——平家物語の背景をなす日本文化の二要素——國家意識のめざめ——平家物語の著者——第二期文學の抒情詩の不健全な理由——閑寂脫俗の趣味——俳諧、狂歌、狂句、小唄——隱遁主義と享樂主義——國家の健全な狀態に歸らんとする心と、心情の自由を求むる心——談林の俳諧と西鶴の浮世草紙——德川の小說が勸善懲惡主義のものか戲作かにならざるを得ざりし理由——謠曲は第一期文學に屬し、淨瑠璃は第二期文學に屬する理由——歌舞伎と淨瑠璃との精神の轉換——第二期文學の價値

第三期の展開……一一一

第三期の敍事文學である政治文學——主情主義と新體詩人——模寫主義の小說から主情主義の小說へ——抒情詩

人から小說家への成長――明治の俳諧――大正初年の文學――自然主義から批評主義へ――社會の劇化と劇的表現――悲壯劇の精神――悲壯劇の榮えた時代――第三期文學の展開と西洋文學との關係――第四期の文學の豫想――一作家の表現と文學の類型

文學の樣式の展開に就いて……一三

古代ギリシア文學及び日本文學に見られる展開――樣式の展開は一度限りのものか――ボエ氏の文學展開の法則――カザミアン氏の心理的な見方――ボエ氏の用ゐた抒情詩、敍事詩、劇の意味――ユウゴオの考へた文學の展開――抒情詩、敍事詩、劇は社會の青春期、成熟期、破綻の時期に相應す――文學の樣式發展が繰返さるゝと云ふ意味――第一期のフランス文學展開――民謠と抒情詩の區別――敍事詩と物語との區別――第二期のフランス文學展開――第三期のフランス文學展開――社會生活に於ける現實と時勢の力との關係――社會に青春期、成熟期、老衰期のある理由――社會の歷史と文學の歷史

詩形論……一四七

音節、語法的音節と音步……一四七

新體詩の行と英詩の行の比較――十二音が六六、八四の如く分たれざる理由――音律の單位――音步の等時性

定形詩の讀み方……一五六

抒情的な讀み方と劇的な讀み方――音步の目的

英詩の行の長さと新體詩の行の長さとの比較……一五七

七五調と四音步詩――詩の行の長さと呼吸との關係――抒情詩形――英詩讀誦の速度

七五調の變化……一六三
五七調……一六四
八七調、八六調、八五調……一六六
八七調が要求された理由——音律上から見た八音及び六音の短所——四四五調
三音節及び四音節を一行とする歌……一七〇
二音節を適當とする內容と三音節を適當とする內容——七五七、五七五の交互するもの——五七に五を加へたるもの——七五を重ねたるもの——長い行と行中停音
七五調よりも短かい行の歌……一七三
短かい行と刹那的な印象——輕快、可憐な調子——四音よりなる音節の缺點
拍節的效果を輕くし各行の音節數を揃へることによつて成立する調子……一七七
自由詩形
音節の釣合の上に感ぜられる詩的律動……一七九
自由詩と散文律——自由詩の今後開拓すべき方面
古代歌謠の形式……一八二
上古の歌の一行の音數——上古の歌を民間詩であると推察すべき理由——七音以上の音節——我國の歌が五七、七五を基礎とする理由——詩脚と呼吸と步調の關係——散文と歌との形式上の相違
漢詩形との比較……一九二

二二調——二三調——四三調

短歌の形式……一九五

古代歌謠の最後の音節——繰返して謠ふ傾向——旋頭歌の原形と和歌の原形——上古の短歌の書き表はし方——萬葉の短歌の書き表はし方——古今集の短歌の書き表はし方——啄木が試みた短歌の書き表はし方

頭韻、母音交響、音色……二〇四

英語頭韻と日本語頭韻との比較……二〇四

母韻交響、子音交響の效果

連續調と終止調……二〇六

連續調221と終止調212——連續調2221と終止調2122——古今調——萬葉の流動調——感傷調212——萬葉調、古今調、新古今調の比較——民謠調——民謠の性質——古今集と小唄との詩形上の關係——和歌の形式と時代精神

和歌の字あまり……二一五

六音の句に於ける純母音の位置——字あまりの種類

歌から散文への推移……二一七

外面的敍述の歌から心緒を述ぶる歌へ——萬葉の長歌と、古今の歌の序詞との比較——和歌と歌物語との關係

自然の愛の發達……二二〇

日本文學に於ける自然の愛の起原——上古人の自然に對する感情——裝飾的趣味——萬葉の色調と平安朝の色調

——支那文學の影響——抒情的な自然の愛——自然に對する精神的な愛を初めて歌つた赤人——戀愛と自然の愛との關係——自然物の情趣的配合——憶良の天の川の歌——人麿の歌——平安朝文學に表現された自然——佛教と自然の愛——自然への逃避——西行——芭蕉——赤人、西行、芭蕉の比較——日本人は自然を中性として觀じ、西洋人は女性美を通じて觀照する——ギリシアに於ける自然の神話的解說——自然に對する敬虔の心——古代人の感じた自然美——清淨な自然の讃美者聖ジエロム——聖フランシスの創造の歌——ルネッサンスの自然の愛——自然美としてのアルプス山の發見——日本アルプスの發見——日本人と西洋人との自然美感の相違

國民文學と世界的文學……三五四

國文學と國民文學——國民文學の自意識——ゲエテによつて用ゐられた世界的文學の意味——各國及び各個人は多少相違した世界的文學を有する——我が國民文學——自我の充實を求むる傾向と、超個人的なものを求むる傾向より觀察したる日本文學——民衆の文學と個人の文學——日本文學に崇高な大作少なき理由——日本文學の主流——明治以後の文學と世界的文學——世界的神話——ギリシア文學の世界的文學に與へた影響——ラテン文學世界的文學としての聖書——中世文學——中世の世界的傳說——十七、八世紀の文學の位置——ルッソオ及びゲエテ——北歐文學——如何にして世界的文學に近づくべきか——東西思想の根本的相違點——世界的文學から見た日本文學——貴族的文學と民衆的文學

近代英文學に於ける批評的精神……三七八

緒言——批評の意義——批評と創作——英文學に於けるカアライルの影響——精神の展開を描く文學——アーノルドの文化主義——ラスキンの人本的藝術批評——文藝批評と社會問題——印象主義の批評——ペイタアの批評の態度——ワイルドの態度

カアライルの批評主義……三八六

彼の生活……二八六
讀書の態度——彷徨時代
彼の文學觀……二八八
彼が人生のための文學を重んじた理由——詩的創造の本質——「見ること」
詩と散文の區別……二九二
韻文と散文——格律、韻、詩人と韻文作者、劇作家と劇詩人——現代精神を表現する文章
詩と美と眞との關係……二九五
音樂的思想——詩的美——神聖な觀念
カアライルと獨逸思想……二九七
反形而上學的態度——ゲエテとフィヒテの感化
カアライルの批評の態度……二九九
批評の態度——傳記的批評——歷史的批評——文學的歷史の價値
カアライルの人生觀……三〇五
文藝の批評から自己の批評、社會の批評への推移——彼の自敍傳——永遠の否定——懷疑の超越——時代精神の特性——機械的人生觀の超越——無意識の深み——永遠の肯定への道——超個人的精神——無關心の中心——享樂主義の否定——行爲の生活
カアライルの象徵主義……三一八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com